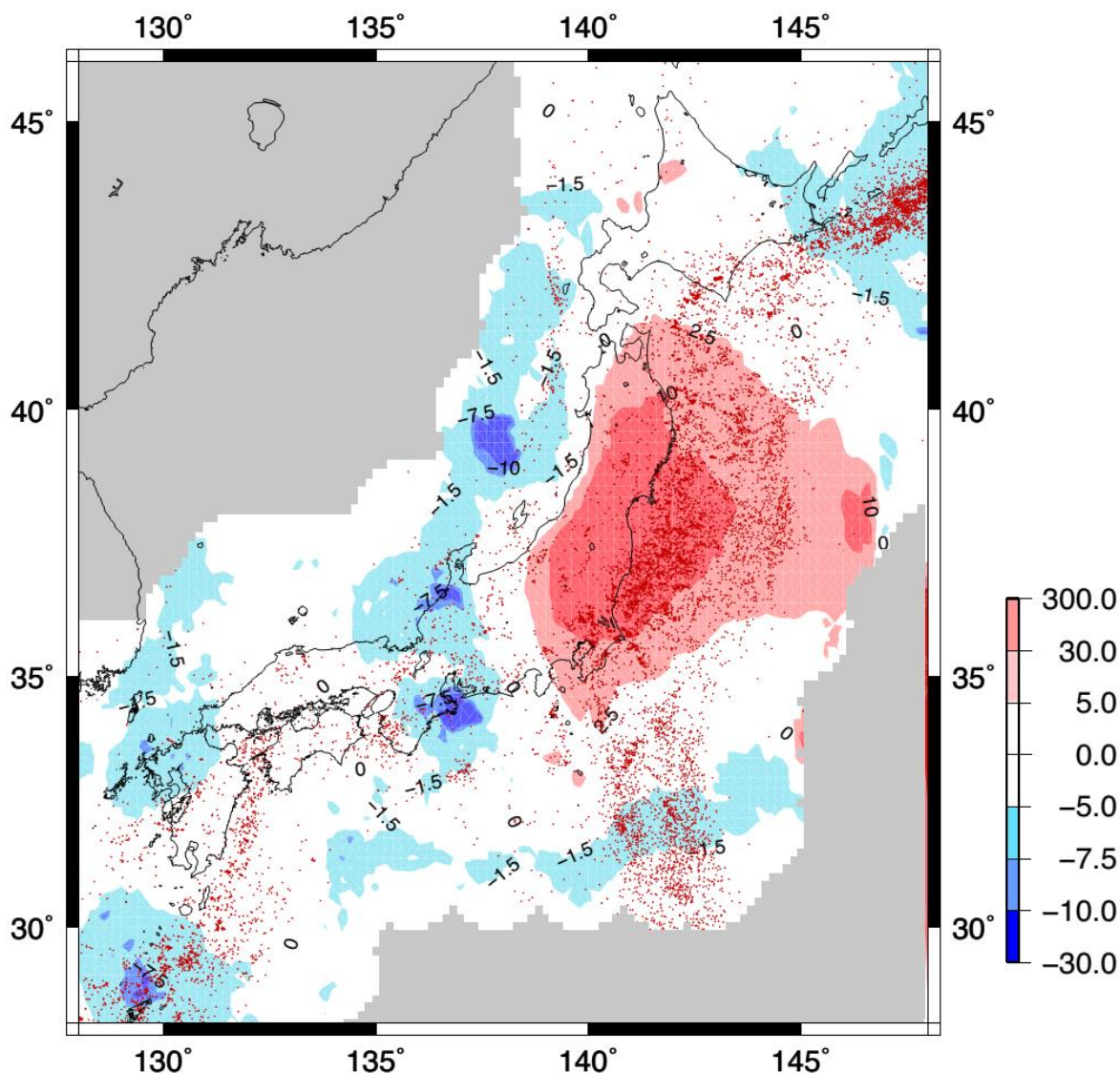


## 最近の日本列島全体の状況

2月18日のニュースレター以来、3ヶ月ぶりに日本列島全体の地下天気図®をお届けします。ご覧になっていただければわかりますように、東北地方に依然として赤い領域が広がっています。これは東日本大震災の影響がいまだ極めて大きく、東北地方およびそこに隣接する地域では地震活動が完全にはうまく評価できていない事を意味します。また全体の状況は、前回2月にお送りしたものと大局的には変化ありません。

ここで見ています地震活動の推移は10年オーダーの変化ですから、数ヶ月では気象変化に比べるとその変化はかなりゆっくりしたものとなっています。

換言すればこの日本列島全域の地下天気図は過去15年間ほどの地震活動のデータを用いておりますが、311以前と以後とで、解析に十分な注意が必要という事を意味します。



以前お知らせした東北のアウトライズの異常（およびそれに引き続く地震発生）は、2011年4月以降のデータのみを用いた短期的な地震活動のゆらぎから予測したものです。この図では東北沖の赤色の地域の中での細かなゆらぎを解析したものです。

重要なことは、地下天気図というのはある地域に対して1種類だけ存在するものではありません。たとえば実際の天気図でも地上気圧の天気図もあれば、高層天気図もあります。今回お示しする日本列島全体の地下天気図はかなり大きな地震（M7クラス以上）を対象としたいわば気象の長期予報に対応する解析とお考えください。

DuMAでは、全国を対象とした解析ではM7クラス以上、地方ごとの解析ではM6クラス以上について情報を提供する事を目指していきたいと思います。

## 今回の地下天気図から言えること

繰り返しになりますが、この地下天気図では、東北・関東・中部地方の地震活動が正しく評価されているとは言い切れません。ここではお見せしませんが、実は3.1.1以降の地震活動だけを用いた解析でも共通の異常として観測されているのは北海道沖（釧路沖から北方4島沖）と日本海中部です。この2地域は長期的にみても、短期的に見ても明らかな地震活動静穏化領域（つまり異常）と言う事ができます。

また現時点では、短期的にみて他の各種観測データには大きな異常は観測されていない事も申し添えます。

## 今後の解析予定

首都圏における複雑なプレート配置（沈み込むフィリピン海プレートと太平洋プレート双方の影響を取り入れた解析アルゴリズム）の開発が進んでいます。実は首都圏では、異常を判断し経験を積む事のできる（適当な規模の）地震が存在しません。この事は、首都圏では近代的な地震観測網が展開されてから、直下型のある程度の規模を持つ地震が発生していないという事を意味します。つまり東京は近代化されてから一度も大きな揺れに襲われていないのです。すべてが初めての経験ではありますが、最重要地域でもありますので、我々としても出来る限り多くの情報を加味して、予測に挑んでいきたいと考えています。